

「ひらかれた教研」をめざし、学校現場からの教育改革を

全国からのべ約1万人が山形の地に集い、私たちは第59次教育研究全国集会を開催しました。

「ひらかれた教研」をめざして、私たちは具体的な一步を踏み出しました。プレスページ「夕べのつどい in やまがた」では、働く仲間、保護者、子どもたちがつどい、地元中学校の吹奏楽演奏、ドキュメント映画「学校のある最後の1年」、コンサートなどで同じひとときを過ごしました。そして、子どもたちの育ちを学校や地域社会で、おとながつながり育んでいくことの大切さを共有しました。

全体集会では、「格差や貧困」の解消、教育の機会均等が重要課題であり、おとなが子どもの学びを支援し、社会的対話を重ねていくことを確認しました。また、「ゆたかな学び」に向けたカリキュラムづくりや教育実践の重要性を提起し、分科会の議論へとつなげました。

記念講演では、「21世紀の子どもたちのために」をテーマにタケカワユキヒデさんが、子育て・海外での経験から「子どもをみんな同じと考えてはいけない」「違う文化も尊重しあう」ことの大切さを語られました。歌を交えながらの「おとなも夢をもとう」などのメッセージは参加者に元気をもたらしました。

分科会では、子どもたちとともに貧困の連鎖・教育格差の解消に向けて日々とりくんでいる学校現場の実践を共有しました。また、授業時数増などで子ども・教職員の負担が増えている中、カリキュラムの工夫、地域との連携、教材・教具の工夫など、子どもの学びを支援するため実践を交流しました。さらに、ディーセントワークを踏まえた労働教育、人権意識を踏まえたメディアリテラシー教育など、「ゆたかな学び」につながる具体的な実践を積み上げていくことが大切です。

特別分科会「子どもの権利・まなびシンポジウム」では、自分たちに身近なできごとから社会のしくみにかかわる問題まで語り合い、子どもたちが学校づくり・まちづくりに発信する場となりました。後半の「おとなシンポジウム」では、さまざまな立場から、自分たちが子どもの育ちにどうかかわるのかを議論し、深め合いました。

子どもたちは、未来を担います。

私たちは、子どもの権利条約の具現化をめざし、平和・人権・環境・共生を尊重する社会の主権者を育むために教育実践をさらに深めていきます。「ひらかれた教研」をめざし、学校現場からの教育改革をすすめていきます。

2010年1月25日
第59次教育研究全国集会